

故辰野弘宣先生の思い出

辰野先生との出会いが私の人生をつくった

山崎 茂雄

1) 出会い（「教育イメージ」の実践をまとめたご著書から）

『授業が変わる学習が変わる』（東洋館出版社）という本を書店で見つけた私は、「これこそ、求めていた本だ！」と感じた。その著者こそ、辰野弘宣先生だった。

都立高校の教員となってちょうど10年。2校目の夜間定時制高校に勤めていた。

文学青年崩れで深い考えもなく教師になり、初任の工業高校定時制で学級崩壊を招いた。心身ともに追い詰められて、3年で逃げるように異動した。

生き方の甘さを痛感した私は、長年続けてきた「自律訓練法」に本気で取り組もうと決意し、毎朝30分、自律訓練法から入る自己流の「イメージ瞑想法」を習慣化した。ほかにもKJ法による自己省察やカウンセリングの学習を経て、私は自分の生き方を見つけ、立ち直ることができた。

異動先の高校では、教師の仕事にやりがいを見つけ、生き生きと働いた。その中で、自分を救ってくれた「イメージ」をもっと授業に生かしたいと試行錯誤を続けていた。

そんなおりに出会った辰野先生の著書は、「イメージ」を授業や学級づくりに活用する事例にあふれていた。そこに書かれた理論も、体験的に共感する点が多かった。小学校の実践だが、校種を越えて通じる普遍性があった。

私は、ぜひこの先生に教えを乞いたいと、奥付に書かれた番号に電話をかけた。すると、先生が直接出られて、気さくに「じゃ、一度、遊びにいらっしやい」と言ってくれた。

横浜市港北区の私の住まいと、登戸の先生のお宅は意外と近く、すぐに訪問させていただいた。先生は私を温かく迎えて下さり、イメージの話、授業の話、教育の話で、語り合いは尽きなかった。

そんななか、私が8年近く習慣として続けてきた「自律訓練法によるイメージ瞑想」のお話をしたところ、とても興味を持ってくださり、「教育催眠学会」でぜひ発表してほしいと勧められた。九州大学の成瀬悟策先生を中心に辰野先生たちがつくられた学会だという。

まさに私は、成瀬先生の本で自律訓練法によるイメージ練習を学んだのだった。その符合がまた私を狂喜させた。

とはいえ、あまりにも個人的な体験なので発表は固辞した。しかし数日後、辰野先生から電話で、「もう申し込んでおいたから」と言われ、既成事実になってしまった。

しかし、後になってみれば、それはとてもありがたいことだった。

2) 教育催眠学会での発表（瞑想体験のレポート）

1993年10月、日本教育催眠学会第19回大会は、日本催眠医学心理学会との共催で、九州大学で行われた。

私の発表は2日目だったが、初日の夜の懇親会で、広島県の佐藤先生が、既に資料として配られていた私の瞑想レポートを読んで、「素晴らしい、発表が楽しみだ」と言ってくださった。また、栃木県の星先生が私の大学時代の後輩の親戚であることが判明するなど、いろいろな先生方と交流ができ、発表の緊張はだいぶほぐれた。

さらに、辰野先生のご紹介で、成瀬悟策先生に対面して直接お礼を言い、一緒に写真を撮っていただいたのも感激だった。

翌日は、おかげでリラックスして発表ができた。いろいろな先生方が興味を持って質問やご意見を下さった。のちに学会の理事長となる鶴光代先生があたたかく、鋭い質問を下さったのを覚えている。

発表後に、岡山県の織井先生ご夫妻と藤原忠雄先生が声をかけてくださった。同い年の藤原先生とは、今も友人としての交流が続いている。

この学会では、他の先生方の発表も拝見したが、いわゆる「催眠をかける」ことで治療効果を得ようとするような、教育現場では実施しにくい事例が多く、催眠を用いずに効果を上げる、辰野先生の実践発表は、貴重な存在だった。

3) 試行錯誤の授業実践と研究誌『変わる』の連載

辰野先生との出会い、教育催眠学会への参加は、それまで自己流で孤独な実践を重ねてきた私には、画期的な出来事となった。

それから毎年、教育催眠学会で発表することを一つの目標に、授業でさまざまな試みをするようになった。ときどき辰野先生のお宅にお邪魔しては、そうした実践の話をしたが、先生はあまり多くのアドバイスはせず、私のすることを見守ってくださったと思う。

そして、先生は、「イメージ」による教育実践を広めるため、私費で季刊雑誌『変わる』の刊行を始められた。そして、私に連載を書けとおっしゃる。

教員として挫折から再出発し、仕事の喜びを見つけたころから、私は文章を書くことを自ら封印した。仕事の上で必要な文章しか書かない、そう決心していた。自分が文学と称して書き続けていた文章は、あまりにも自己満足的なものだったと反省したからだった。

しかし、辰野先生からお話をいただいたとき、自分の経験や考えが誰かのヒントになればと素直に思えて、すぐお引き受けした。

タイトルは『私流教師のセルフコントロール』。

瞑想レポートの後日談だが、日常のイメージ活用から始まり、休職派遣の大学院生活、離婚の顛末、実家で息子を育てるシングルファザーの暮らし、再婚から親の介護まで、10年以上50回を越えて、自分自身の人生道程のセルフコントロールを語り続けるシリーズとなった。

4) 「カットイメージ」のアイデアと心理学への道

自己流で学んだ心理学を通して生きる道を模索し、心理学を活用して教師の仕事に取り組んでいた私は、長年、心理学をしっかりと学びたいという憧れを持ち続けていた。

辰野先生に出会い、イメージの実践を深めるとともに、その気持ちはさらに強まり、大学院への進学の間を探るようになった。

それと前後して、授業の実践の中から、私の頭の中に「カットイメージ」というアイデアが浮かび、具体的にまとまっていった。

それは、小説を読む際に心に浮かぶ映像的なイメージを映画のカットのように区切り、それをもとに対話を進めるといふ、国語授業の手法である。やってみると、生徒たちはみな集中して作業し、目を輝かせて意見を言うようになる。イメージを活用した授業をと願ひ、試行錯誤してきたことの一つの到達点だった。

喜び勇んで辰野先生にお話しし、教育催眠学会でも発表の機会をいただいた。

しかし、先生の反応は、私の期待したものとは違った。「これが広く知られば、きっとイメージ授業の主流になっていくのだろうね」と少し寂しそうに言うのだった。もっと自由で多彩であるべきイメージが、一定の枠に制約されてしまうとお感じだったのかなと思う。

それでも、私の実践をあたたく応援して下さる態度に変わりはない。

間もなく私は、念願かなって1年間の休職制度で大学院への進学を果たし、「カットイメージ」の心理学的研究に打ち込むことができた。

修士論文は『カットイメージ読解法の研究』。心理学実験の条件を整えた環境で、カットイメージが物語の山場の記憶を高めるなど、学習効果を示す結果が得られた。

大学院での学びを通じて、教授や学生と交流し、教育心理学の世界に触れることができた。とりわけ大学院に学ぶ現職教員同士の仲間ができた。学校心理士などの資格も取得し、心理学を教育現場で活用していく自信がついた。

5) 教育催眠学会との決別

大学院から戻った私は、別の定時制高校、全日制普通科高校などを経験したのち、チャレンジスクール「都立稔ヶ丘高校」で新たな学校づくりに取り組んだ。

とくに、人間関係スキルと学習スキルを教える学校設定科目「コーピング」の授業づくりに教育心理学の素養を縦横に活用した。その後、キャリア教育のプログラム作りにも力を発揮することができた。それらの取り組みも『変わる』の連載に書き続けたし、辰野先生のお宅をときどき訪問してはお話した。

また、各地区の持ち回りで開催される日本教育催眠学会大会には毎年参加し、発表も積極的にするようにしていた。すると、私はいつの間にか学会の理事になっていた。

学会の先生方はみな個性派ぞろいで、年に一度、お会いして語り合うのは楽しかった。

しかし、研究面では最初に感じた通り、旧態依然たる「催眠をかける」というスタンスから出られない実践が多かった。催眠から学んだ原理を、イメージを通じて現場で使えるものに

しようと提案する辰野先生は、孤高の人に見えた。

また、会員の高齢化が進むなか、新入会員も少なく、学会は先細りの運命をたどっていた。

自律訓練法の指導などで研究成果を上げていた私と同年の藤原忠雄先生は、教育催眠学会を退会し、ストレスマネジメント学会の立ち上げなどに舵を切って行った。「教育催眠学会の将来を本気で考えているのは、辰野先生だけだ」とのことばを残して。

私も実は同じことを感じていた。辰野先生は、教育催眠学会の事務局として、会計事務、機関誌発行などを一手に引き受けておられた。先生の年齢を考えると、他の支部で事務局を引き受けてほしいと私は何度か提案したが、下の世代で定年退職を迎えた先生方なども、本気でとりあってはくれなかった。

辰野先生は生来の世話好きで、事務局の雑用も苦にならないようだった。先生に依頼されて、私も会計などのお手伝いを始めた。しかし、そうするといっそう学会の業務を辰野先生に丸投げしたうえに、あとは山崎が引き継いでくれるだろうという、安易な雰囲気を感じた。やがて私は、それが耐えられなくなった。そして、学会からの退会を申し出たのである。

6) 変わらぬおつきあい

私の退会について、辰野先生は「前途を悲観しすぎだ。なぜ、前向きに考えないのか」と評された。「師と袂を分かつ」とはこのことか、と私は悲しかったが、決意は変えなかった。

しかし、その後も、先生のお手紙やお電話の調子は以前と変わらなかった。頻度は少なくなったが、先生のお宅を訪れて、近況や教育実践について語りあうことも再開した。

ただ、変わらずに教育催眠学会の参加案内や学会誌投稿のお誘いがあるのには、正直閉口した。私自身は学会に背を向けた形で、もはや戻れるとも思わなかったが、先生はいつでも戻ってこいというおつもりだったのだろう。

辰野先生自身は、私が抜けた分の仕事も含めて、学会の事務局を続けておられた。

その一方で、趣味の絵画では毎年、展覧会に出品されていたし、地域のお仲間と俳句の会を開き、定期的に句集を発行しておられた。

いつお会いしてもお元気で、必ず「次はこういう本を出したい」という話をされていた。それは終生、変わらなかった。

長年連れ添った奥様を亡くされたときも、心の痛手はさぞやと思いやられたが、表向きはずっとお元気で、奥様の追悼文集の作成、知人への配布と、精力的に動いておられた。

7) 果たせた「約束」と別れ（「カットイメージ」の出版）

私の念願であり、勝手に「辰野先生とのお約束」と思っていたのは、「カットイメージの本を出す」ということである。そう思うようになってから 20 年以上、いつも日常の忙しさに紛れて、先延ばし先延ばしで来たような気がする。

2020 年 2 月、ようやく私は『映画を観ているみたいに小説が読める超簡単！イメージ読書術』を上梓することができた。国語の授業で開発、実践してきたカットイメージの方法を、

大人向けの読書法として紹介する本である。

辰野先生との出会いから 27 年、カットイメージの発案から 25 年が過ぎていた。

さっそく本をもって先生のお宅を訪問したが、とても喜んでくださった。そして、知人に配るからと追加で 10 冊も購入してくださった。

しかし、今にして思えば、本当に間に合ってよかった。そのまま先延ばしにしていれば、取り返しのつかない後悔に悩んだことだろう。

辰野先生が重篤な状態だとご息女様からご連絡をいただいたのは、その年の 11 月のことである。

新型コロナウイルスが猛威を振るうなか、ご息女様のご厚意で、病院へお見舞いに伺うことができた。看取りの期間を穏やかに過ごせる病院で、先生とゆっくり対面することができた。

その手を握ったり、足を触ったりさせていただいたのも、最初で最後のことであった。

お通夜のおりは、ご息女様のご厚意で、ずいぶん早い時間に呼んでくださった。辰野先生が主催していた川崎の研究会の先生方が集まる時刻だった。

顔見知りである川崎の先生方と、久々にお会いできたし、先生方がお帰りになって、人気が途絶えた通夜式までの時間を、会場で静かに過ごすことができた。

辰野先生のお顔をつくづくと拝見して、お礼を伝えることもできたし、お若いころの写真を見たり、並べられたご著書をゆっくり眺めたりすることもできた。

ふり返ってみると、辰野先生との出会い・交流が、私のその後の人生を大きく方向づけてくれた。

私にとって辰野先生は、今生で出会った唯一無二の師であった。

2022.8. 辰野弘宣先生思い出集『薔薇の花束』に寄稿